



【令和8年「土地月間」作品コンテスト エッセイ部門】

金メダルは、一人では取れない

森元 仁隆

台東区の路地を入ったところに、子ども食堂がある。

ビルの一階。白い壁と、よく磨かれた床。初めて訪れた人は必ず、いい意味で「想像と違った」と口を揃える。私自身も、この場所がかつて、ネズミやハトのたまり場になっていたとは、とても想像できなかった。

この場所の成り立ちを知ったのは、ボランティアスタッフとしての活動を始めて、一年ほど経った頃のことだ。オーナーがビルの一階を無償で貸し出す代わりに、借り手が自ら手入れをして使う。いわゆる現状渡しの約束で成り立っているのだと聞いた。荒れたまま眠っていた空間が、人の手と意志によって、まったく別の顔を持つ場所に生まれ変わった。

私はここに週一回、ボランティアとして来る。子どもたちと宿題を解き、お菓子を食べ、他愛もない話をする。特別なことは、何もしていない。それでも、この場所がどれほど必要とされているか、私はよく知っている。

やってくる子どもたちの中には、様々な事情を抱えた子がいる。家に帰っても誰もいない子。下のきょうだいの面倒を見ながら生活している子。誰にも言えない何かを飲み込みながら、懸命に今日を過ごしている子。彼らはここで宿題を広げ、ご飯を食べ、誰かと言葉を交わす。それだけのことが、どれほど大切なを、私はこの場所で繰り返し感じてきた。

だから私は、問題が解けたときや、食堂まで来てくれたことに対して、言葉を惜しまないようにしている。誰かに気づいてもらえる、その小さな積み重ねが、子どもにとってどれだけの意味を持つかを、身をもって感じてきたからだ。

そうしていると、ふと思う。このビルのオーナーは、今ここで何が起きているかを知っているのだろうか。

自分の土地を手放したわけでも、売ったわけでもない。ただ「きれいにしてくれるなら使っていいよ」と何気なく貸し出した一階が、毎週、子どもたちの声で満たされている。所有者と地域とが、それぞれの思いを持ち寄って生まれた、小さくて確かな場所。

この食堂の誕生を思うと、土地の活用とは、大きな開発だけを指す言葉ではないと感じる。誰かの小さな決断が連鎖して、必要としている人のもとへ届く。土地は、生きている。その連鎖そのものが、土地の持つ本来の力だ。

金メダルは、一人では取れない。オーナーがいて、整えた人がいて、運営する人がいて、それを手伝える人がいて、やってくる子どもたちがいる。この場所で起きていることは、そのすべてが揃って初めて成り立っている。

荒れた空きビルが、子どもたちの居場所になった。私にはそれが、まさに土地活用の金メダルのように輝いて見える。